

いこいのみぎわ  
天路歷程 ジョン・パニヤン

第59話

2023年1月1日～1月7日 各家庭でのディボーション用テキスト

とりわけ、彼ら自身がこのような仲間と共に、いつまでもいつまでも、そこに住むのだということについて抱いた熱い喜びと言ったら！ おお、彼らの輝かしい喜びは、どんな口や筆がよく表わし得よう。こうして彼らは門についた。さて、彼らが門に着いたとき、そこには金文字で書いてあった、「命の木にあずかる特権を与えられ、また門をとおって都にはいるために、主の戒めを守る者は幸いである」【黙 22:14】。

それから私が夢で見ていると、輝ける者たちが彼らに門を訪れるよう命じた。そのとおりすると、門の上から見下ろしている者がいた。これはエノク、モーセ、エリヤなどであって、彼らには、「この巡礼者たちはこの地の王に対して抱く愛のために滅亡の都から来たものです」と告げられた。そこで巡礼者たちはそれぞれ初めに受けた証明書を彼らに差し出したので、それは王の所に届けられた。王はこれを読み終わると、「その人たちはどこにいるか」と言われた。「門の外に立っております」と答えると、王は「門を開いて、信仰を守る正しい国民を入れよ」【イザ 26:2】と言われた。

さて、私が夢で見ていると、この二人は門から入って行った。すると見よ、彼らが入ると姿が変わって、黄金のように輝く衣を着せられた。また立琴と冠とを持った者が出迎えて、それを彼らに与えた。立琴は賛美するためで、冠は名誉のしるしであった。それから私は夢の中で、都中のすべての鐘が再び喜びのために鳴りひびき、また彼らに向かって、「あなた方の主の喜びに入れ」【マタ 25:21】と言われるのを聞いた。私はまた彼ら自身が声高らかに歌うのを聞いた、「み座にいますかと小羊とに、さんびと、ほまれと、栄光と、権力とが、世々限りなくあるように」。【黙 5:13】

さて、二人を入れるために門が開いたその時、彼らの後から私も覗き込むと、見よ、都は太陽のように輝いていて、街路も黄金で舗装され、そこには多くの人々が頭には冠をいただき、手にはしゅろの枝を持ち、賛美を歌うために、黄金の立琴を持って歩いていた。

また翼のある人々もいて、絶え間なく、「聖なるかな、聖なるかな、聖なるかな、主」【黙 4:8】と言って、互いに応答していた。その後で門は閉じられたが、私も見た後、彼らの仲間入りをしたいものだと思った。

さて、これらすべてのことを見つめていた間に、頭をめぐらして振り返ると、無知者が川岸に近づいて来るのが見えた。ところが彼はすぐと渡ってしまった。しかも先の二人が出会ったあの困難の半分も経験しなかった。折からそこに空頼み者という渡し守りがいて、モの小舟で彼を助けて渡してくれたからである。こうして彼は、以前に見た人たちと同じように門の所に来るために丘を登って行った。ただし

独りきりで、彼を出迎えて少しでも励ましてやろうとする者は一人もなかった。門に達したとき、上に書いてある文字を見上げた。それからすぐ入れてもらえると思って叩き始めた。ところが門の上から見下ろしていた人々から、「どこから来たのですか、何用ですか」と尋ねられた。彼は答えた、私は王のみ前で飲み食いしたことがあります、また王は私たちの街で教えられたこともあります。すると、彼らは証明書をお出しなさい。中に入って王にお見せするから、と言ったので、彼は懐を手探りしたが見当たらなかった。持っていないのですかと尋ねられたが、彼は一言も答えなかった。そこで彼らは王に申し上げたところ、王は彼を見に下りても来られず、基督者と有望者とを都に案内した二人の輝ける者に、外へ出て無知者をとらえ、手足をしばって追い払えと命ぜられた。そこで二人は彼を引とらえ、空中を通過して丘の中腹に見えた戸口に運び、そこに入れた。その時私は滅亡の都と同様、天の門からも地獄に通じる道があると分かったのである。こうして私は目がさめると見よ、それは一場の夢であった。

## 結 び

さて、読者よ、私は夢を語り終えた。  
その説き明かしができるか考えたまえ、  
私に、あなた自身に、あるいは隣人に。  
気をつけて、解き誤りをせぬように。  
それは益とはならず、自分の害となろう。  
解き誤りは災を生じるものだ。

また気をつけて、極端に、  
私の夢のうわべに興ぜぬように。  
隠喩や比喩が  
笑いや反目を引き起こさぬように。  
それは子供と愚か者にとり任せて  
あなたは問題の真髄を見るように。

幕を引き寄せ、ヴェールをのぞき、  
隠喩を掘りおこすことを怠るな。  
もし探し求めるならば、そこに  
誠実な心を助けるものを見出しもしよう。

金くずを見出したなら  
思いきって投げすてるがよい。  
しかし黄金はとっておくように。  
それが原鉱の中に含まれていたらどうか。  
しんがあるからとてりんごを捨てるものはない。  
だがすべて空しいと捨てるなら、  
私はもう一度夢を見ないとも限らない。

終り。

【ジョン・パニヤン 天路歷程 正篇 より】

※この本は図書に置かれています。さらに読みたい方はどうぞご利用下さい